

## 直方高等学校

「表現力を高める指導方法の改善並びに効果的な評価方法の確立」

### 1 はじめに

創立 110 周年を迎えた本校は、文武両道を掲げ、「礼節、努力、理想」の校訓のもと人材の育成に努めている。スクールポリシーである「志の実現に向けて努力を続け進取の気鋭を有する人材を育成する」ため、本年度は「主体的な学びをとおして、自己を表現することができる生徒の育成」を目指し教育活動を行っている。

### 2 新たな学びプロジェクト

#### (1) 平成 30 年度の取組

研究テーマを「深い学びを誘発する学習手法の工夫」として、1 年間プロジェクトに取り組んだ。年度始めに、本校の課題を検討した結果、授業で積極的に自らの意見を発表したり表現したりすることができないという生徒側の課題と、「深い学び」につなげるための授業の手法が確立されていないという教員側の課題が見えてきた。そこで、目標を①生徒の考えを深めるための授業の研究と工夫を行うこと、②生徒が自ら考えて積極的に発言したり自身の考えをまとめて表現したりする活動を増やすこと、③「主体的・対話的で深い学び」を通じて思考力や表現力、問題解決能力に富んだ生徒を育成することの 3 点とした。さらに、具体的手立てとして、①毎時間の明確な「到達目標」の設定、②「考察する場」の設定、③「表現する場」の設定、④授業が一方通行にならないための展開の工夫の 4 点を設定し、授業改善に取り組んだ。年間を通じた取組の成果として、生徒の主体的な活動が設定された授業では、生徒が感じる理解度や満足度が向上したことや、教員のアクティブ・ラーニングに対する肯定的な意見が増加したこと、学習環境の整備が進んだこと（アクティブ・ラーニンググループの創設、電子黒板型プロジェクターの設置、Wi-Fi 環境の整備等）が挙げられた。一方、課題として、生徒が行う活動の明確な目標設定や評価方法が確立できていないこと、授業改善を行う体制が整っていないことが挙げられた。

#### (2) 令和元年度の取組

プロジェクト 2 年目にあたる本年度は、昨年度の成果と課題を踏まえ、研究テーマを「表現力を高める指導方法の改善並びに効果的な評価方法の確立」とした。伸ばしたい力を「表現力」と焦点化し、「表現する」活動に関して教員からの一方的な評価ではなく、生徒自身の自己評価や生徒同士の相互評価を行うなど「効果的な評価方法」を確立することを目標とした。

### 3 具体的取組

#### (1) 体制づくり

授業改善に組織的に取り組むため、プロジェクトチームを結成した。その際、プロジェクトの方針を各教科で共有し、授業実践からのフィードバックを円滑に行うため、教科主任が中心メンバーとなるようチームを構成した（図1）。そうすることで、情報共有が円滑になり、協議する内容を教科に特化した、より具体的かつ実践的な内容で行えるようにした。

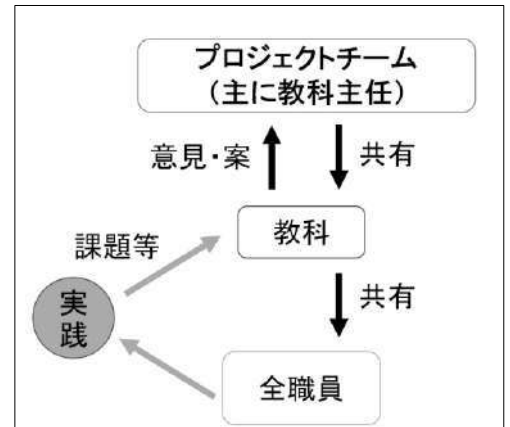


図1 組織体制

#### (2) 「表現活動」および「効果的な評価方法」の具体化

授業での「表現活動」や「効果的な評価方法」について具体化するため、各教科会議にて、①各教科において「表現する」とはどういうことか、②各教科において「表現する」上で重視することは何か、③各教科において「表現力が高い」状態とはどのような状態か、④「表現力」を適切に図り、さらなる学習を促す適切な「評価方法」としてどのようなものが挙げられるか、の4点を協議し、後日、その内容について大学教授であるアドバイザーおよび教育センター指導主事から指導・助言をいただいた。当初、授業における生徒の「表現する」活動は教科毎に少しずつ異なると考えていたが、各教科で挙げられたものを整理すると、「表現する」活動は「書く（解く）」、「話す」、「つくる（動き・作品）」、「発表する」の大きく4つに分類できることが確認できた。

#### (3) 現状把握（事前アンケート）

生徒の表現活動の到達状況を把握し、授業の課題や改善点を明確にするため、6月下旬に全校生徒および教員を対象とした事前アンケートを実施した（資料1・2）。

#### <生徒用>

	はい (多い)	どちらかと 言えば はい (多い)	どちらかと 言えば いいえ (少ない)	いいえ (少ない)
① 授業中に達成感や満足感（「よく分かった」、「よく頑張った」）を感じることはありますか。	4	3	2	1
② 自分の考えをまとまりのある言葉で書くことは得意ですか。	4	3	2	1
③ 自分の考えをまとまりのある言葉で他者に話すことは得意ですか。	4	3	2	1
④ 自分の思いを作品に表したり、身体で動きを作ったりすることは得意ですか。	4	3	2	1
⑤ 人前で自分の考えを発表することは得意ですか。	4	3	2	1
⑥ 自分なりの考えの中で、意図や根拠（なぜそう考えるのかの理由）を説明することはできますか。	4	3	2	1
⑦ 自分の考えと他人の意見とを比べることはありますか。	4	3	2	1
⑧ 話し合いをするとき、積極的に発言をすることはできますか。	4	3	2	1
⑨ 話し合いをするとき、相手の発言に対して自分の考えを持って発言することはできますか。	4	3	2	1
⑩ 発表の場で様々な手段（身振り手振りや言葉の抑揚、図やグラフの提示等）を使って分かりやすく伝えることはできますか。	4	3	2	1
⑪ 授業の中で、最も理解が深まると思う形態はどれですか。当てはまるもの1つに○をつけてください。	グループで 取り組む 学習	ペアで 取り組む 学習	個人で 取り組む 学習	

資料1 生徒用事前アンケート

< 教員用 >

	はい (多い)	どちらかと 言えば はい (多い)	どちらかと 言えば いいえ (少ない)	いいえ (少ない)
① 授業のはじめに本時の目標を明示していますか。	4	3	2	1
② 授業中に生徒個人が意見を表現する(書く・話す・身体で表す)場を意図的・計画的に設定していますか。	4	3	2	1
③ 授業中に班やグループで生徒同士が意見を交わす(書く・話す・身体で表す)場を意図的・計画的に設定していますか。	4	3	2	1
④ 生徒は、自分の考えをまとまりのある言葉で書くことはできると思いますか。	4	3	2	1
⑤ 生徒は、自分の考えをまとまりのある言葉で他者に話すことはできると思いますか。	4	3	2	1
⑥ 生徒は、意図や根拠を添えて自分の考えを説明することはできると思いますか。	4	3	2	1
⑦ 生徒は、他者の前に出て自分の考えを発表することはできていると思いますか。	4	3	2	1
⑧ 生徒は、班やグループで積極的に意見を交換していると思いますか。	4	3	2	1
⑨ 生徒は、様々な手段(ジェスチャーや資料掲示)を用いて発表することはできていると思いますか。	4	3	2	1
⑩ 授業のまとめとして、本時の目標が達成できたかの振り返り(生徒の自己評価)を行う場を設定していますか。	4	3	2	1
⑪ アクティブ・ラーニングは生徒の学力向上に効果があると思いますか。	4	3	2	1
⑫ 生徒は、主体的な学びを通して自己を表現することはできていると思いますか。	4	3	2	1

資料2 教員用事前アンケート

(4) 事前アンケート分析結果

ア 授業やアクティブ・ラーニングに関すること

生徒対象の事前アンケートの中で、「①授業中に達成感や満足感を感じることはありますか」という質問に対して 75%の生徒が肯定的な回答をした。また、「⑩授業の中で最も理解が深まると思う形態はどれですか」という質問に対して、61%が「グループ」での活動、24%が「ペア」での活動、15%が「個人」での活動と回答し、85%の生徒が他の生徒との協働的な学びによって理解が深まると感じていることが分かった。

教員対象の事前アンケートでは、「③授業中に班やグループで生徒同士が意見を交わす場を意図的・計画的に設定していますか」という質問に対して、75%が「はい」「どちらかと言えばはい」と回答している。また、「⑪アクティブ・ラーニングは生徒の学力向上に効果があると思いますか」という質問に対して、78%が肯定的な回答を示した。これらの結果からも、昨年度の新たな学びプロジェクトの取組の成果が見受けられた。

一方、教員対象の事前アンケートにおいて、「⑩授業のまとめとして、本時の目標が達成できたかの振り返り(生徒の自己評価)を行う場を設定していますか」という質問に対しては、70%が「いいえ」「どちらかと言えばいいえ」と回答しており、6月時点では、授業内での振り返りの場があまり設定されていないことが分かった。

イ 表現に関する項目

事前アンケートの質問項目のうち、「表現」に関する項目のみに着目した場合、生徒と教員どちらともに肯定的な回答が多く見られた。しかし、「⑥意図や根拠を説明することはできますか」という質問に関しては、生徒の 50%が肯定的な回答をしたのに対し、教員の肯定的な回答は 13%と低く、生徒と教

員との間に「意図や根拠」に対する本質的な認識のズレがあることが分かった（図2）。

「意図や根拠」とは、生徒は「なぜそう思ったのか」の理由を端的に述べることだと捉えており、一方、教員は、具体的な数値やデータ、現象等を用いて述べることだと捉えており、そこから生じるズレであることが分かった。

自らの考えの「意図や根拠」について、客観的なデータなどの資料を用いて説明できることは、思考力や判断力を高めることにも繋がる。そこで、「意図や根拠」に焦点をあて、授業内で行う「表現する」活動の中で「意図や根拠」を述べる場を設けること、教員がそれらについて言及したり、発問の工夫やさらなる協働的な学習を通して熟考する場を設けたりすることを今後の重点項目として授業改善に取り組むこととした。

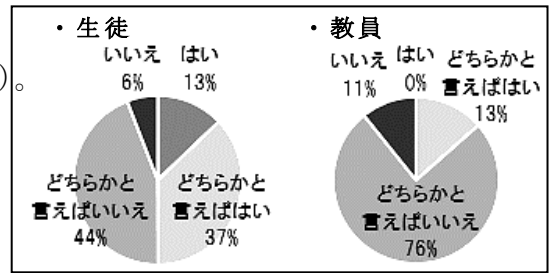


図2 意図や根拠を説明できるか

### (5) リフレクションシートの作成

表現活動や生徒の自己評価、授業での振り返りの機会を計画的に取り入れるため、全教科共通のリフレクションシートの作成を行った（資料3）。リフレクションシートは、「表現する」活動を中心とした授業において使用することを想定とし、授業内での学びを構造化できるように、「1 本時の目標」「2 本時の『表現する』活動」「3 本時の振り返り」を記入する欄を設けた。また、「4 本時の自己評価」の欄も設け、振り返りの時間に生徒自身が項目に沿って「表現する」活動について自己分析できるようにした。さらに、全教科で使用できるように文言を工夫した。

1 本時の目標

3 本時の振り返り

4 本時の自己評価

2 本時の「表現する」活動

本時の活動 ※あてはまるものに○を記入			
書く (解く)	話す	つくる (動き・作品)	発表する
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 答えを書く</li> <li>・ 考え・思いを書く</li> <li>・ 文章を書く</li> <li>・ 絵や図、表やグラフを書く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 答えを言う</li> <li>・ 考え・思いを言う</li> <li>・ 説明する</li> <li>・ 討論する</li> <li>・ 意見をまとめる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作品を創作する</li> <li>・ 身体の動きをつくる</li> <li>・ 考えや思いを形で表す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分/班の答え・考え・思いを伝える</li> <li>・ 表現を工夫する</li> <li>・ 共有する</li> <li>・ 周りの反応を知る</li> </ul>

授業内で行う表現活動を確認する

<自己評価> ※あてはまるものに○を記入

- 自分の考えをまとまりのある言葉で表現（書く、話す、つくる、発表する）ことはできましたか。  

はい	どちらかと 言えばはい	どちらかと 言えばいいえ	いいえ
4	3	2	1
- 自分なりの考えの中に、意図や根拠（なぜそう考えるのかの理由）を説明することはできましたか。  

4	3	2	1
---	---	---	---
- 話し合いをしたとき、積極的に発言することはできましたか。  

4	3	2	1
---	---	---	---
- 話し合いをしたとき、相手の発言に対して自分の考えをもって発言をすることはできましたか。  

4	3	2	1
---	---	---	---
- 発表の場で様々な手段（身振り手振りや言葉の抑揚、図やグラフの提示等）を使って分かりやすく伝えることができましたか。  

4	3	2	1
---	---	---	---

各項目に対して到達度を4段階から選択する

(6) 第1回公開研究授業

令和元年7月8日(月)に第1回研究授業を行った。また、午前中を公開授業として、全授業で①アクティブ・ラーニングの要素を取り入れた授業展開、②リフレクションシートを用いた振り返りの時間の設定を具体的目標とした授業を実施、午後からは全教員参加の研究協議を行った。なお、当日の全ての授業について事前に「授業構想シート」(資料4)を作成し、参観者が授業の目標や手立てを確認できるようにした。

表現力を高める指導方法および効果的な評価方法の実践  
 ( )限 実施クラス( )実施場所( )  
 教科・科目( ) 実施者( )

1. 単元名
2. 本時の指導目標
3. 本時の手立て  
(生徒の表現力を高めるための指導の工夫)
4. 本時の授業仮説
5. 学習の展開(学習内容・活動)

導入	本時の目標
展開	
まとめ	

資料4 授業構想シート

ア 研究授業および第1回研究協議

どの授業においても生徒が課題に対して協働的かつ積極的に取り組む姿が見られた。また、授業内でタブレット端末や電子黒板型プロジェクター等のICT機器が積極的に活用されており、昨年度に比べ、使用場面や使用目的が多岐に渡っていた。これらは、各教員が日頃から授業の手立てに関して試行錯誤を重ねながら実践を繰り返し、積極的に授業改善を行ったことによる成果であると思う。研究協議は、研究授業を参観した教員による「研究授業に関する協議」と、研究授業を参観できなかった教員によるこれまでの「プロジェクト全体に関する協議」の2種類に分けて実施した。

「研究授業に関する協議」

【協議の柱】

表現力を高めるための

- ①授業者の工夫や生徒の反応が感じられた点はどこか。
- ②今後に向けた授業の改善点や課題点は何か。

研究協議は、昨年度同様、授業者による説明の後、研究授業別にKJ法を用いたワークショップを行った。そして最後に、代表者の発表による全体共有の場を設けた。生徒に対する授業だけでなく、我々教員も「アクティブに」「協働的に」研究協議を行うことができた。

研究協議を通して、表現力を高める活動の中で、考えるプロセスを大事にしながら既習知識と新しい知識や学びをバランスよく高めていくことが重要であるという指摘がなされた。また、既習知識を活かし、それを深めるために表現する活動の場面設定や発問の工夫を行うようにするとよいのではないかという意見が出た(図3)。基礎・基本の定着および授業内での活動の意義を改めて認識できたことは、今回の授

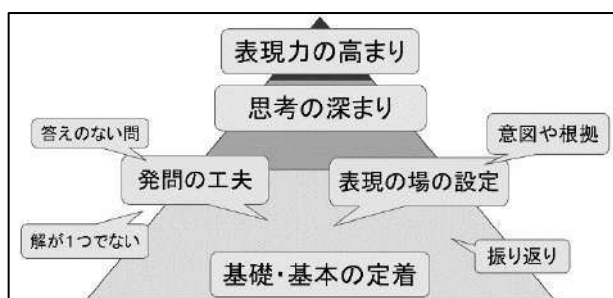


図3 研究授業に関する協議のまとめ



関することとした。これらを各教科会議にて共有し、次年度の課題を協議した。

各教科から挙げられた授業での「表現する」活動の工夫点は、表現の幅をもたせる課題設定やロールモデルの提示、意見や考えをまとめやすいようなワークシートの作成、思考ツールの提示等であった。また、協働学習を行うにあたり、日頃の環境づくりや生徒の役割分担の明確化、個人の支援と全体の支援の両方を適宜行うことの必要性が挙げられた。一方、課題としては、授業内での表現活動と実際の学力の結び付きが挙げられた。

#### 4 成果と課題

本年度は、授業内で「意図や根拠」を踏まえて考えを発表する場を設け、さらに協働的な学びを通して自分の考えを深める活動の工夫などを中心に、授業改善に取り組んできた。こうした活動の中に振り返りの場を設けることで、授業内での学びの確認および思考の深まりや拡がりの認識を図り学びのサイクルを生み出す手がかりとした。こうした取組の結果、6月の事前アンケートにおいて生徒と教員とで大きく差がみられた「⑥意図や根拠を説明することはできますか」という質問に対する教員側の肯定的な回答は、12月の事後アンケート時点では13%から50%へ向上した(図4)。実際、以前は教員からの発問に対して用語や答えのみを答える生徒が多かったが、意図や根拠を添えて発表することを意識しながら、より説得力の高い解答を目指す生徒が多くなった。また、「⑩授業のまとめとして、本時の目標が達成できたかの振り返り(生徒の自己評価)を行う場を設定していますか」という質問については、肯定的な回答が30%から47%と若干増加した。これらのアンケート結果から、意識的な授業改善が行われ、生徒の表現活動においても一定の成果が現れたと考えられる。

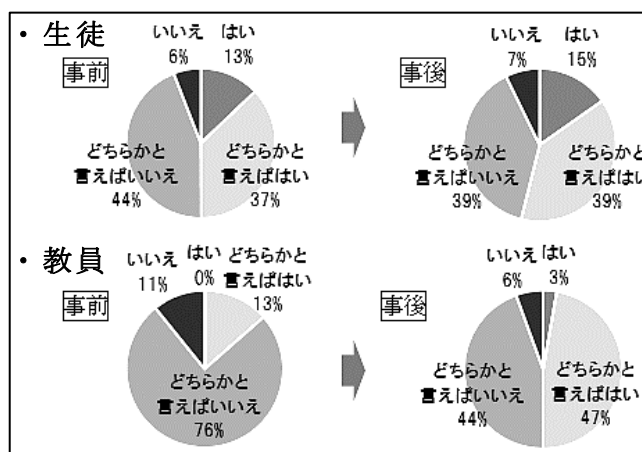


図4 意図や根拠を説明できるか

12月の事後アンケート時点では13%から50%へ向上した(図4)。実際、以前は教員からの発問に対して用語や答えのみを答える生徒が多かったが、意図や根拠を添えて発表することを意識しながら、より説得力の高い解答を目指す生徒が多くなった。また、「⑩授業のまとめとして、本時の目標が達成できたかの振り返り(生徒の自己評価)を行う場を設定していますか」という質問については、肯定的な回答が30%から47%と若干増加した。これらのアンケート結果から、意識的な授業改善が行われ、生徒の表現活動においても一定の成果が現れたと考えられる。

2年間の取組を通して、組織的に授業改善を図り、適宜教科会議で授業に関して共有・協議する場を設けてきたことにより、日頃の授業を定期的に振り返り、個人が蓄積した技術や知識を教員間で共有できたことは、個人でも学校全体でも積極的な授業改善に繋がった。この2年間で生徒が主体となって取り組む活動の設定や、学びを促進するためのICT機器の活用が授業内の多くの場面で取り入れられるようになったと感じる。

一方、課題として、本年度のテーマであった「効果的な評価方法」に関しては、生徒の自己評価に留まっており、実際に授業内での活動が学力向上に繋がっているかの客観的な検証や、学習指導要領(平成30年度告示)が示している育成を目指す資質・能力の3つの柱に基づいた観点別評価の在り方については、今後重点的に取り組む必要がある。教科ごとの評価の観点を明確にしながら、それをもとに生徒の変容を的確に捉え、指導の改善を図るといった評価と指導を結び付けた見通しをもった教育計画を組織的に取り組んでいきたい。

## 数学科（数学Ⅰ）学習指導案

学校名 福岡県立直方高等学校

指導者 職名 教諭 氏名 松尾 博美 印

実施日時 令和元年7月8日 月曜日 4時限

実施学級 第1学年5組29名(男子15名 女子14名)

実施場所 1年5組教室

## 1 単元名 第3章 2次関数 第1節 2次関数とそのグラフ

## 2 単元設定の理由

## ○教材観

本単元は、関数の概念を互いに関連しながら変化する対応関係として理解し、数量の変化を表現することの有用性を認識し、具体的な事象の考察に応用することができることをねらいとしている。関数の単元においては、中学校で学習してきた比例や反比例、1次関数の単元の中で、変数や座標軸の扱い方やその意味について触れている。また、関数  $y = ax^2$  の性質をもとに、一般の2次関数  $y = ax^2 + bx + c$  およびそのグラフの性質について段階を追って考察し、事象において伴って変わる2つの数の対応と変化の関係について理解を深める。自由落下や制動距離を始めとする具体的な自然現象が2次関数で表される関数でもあるように具体例を通して関数の有用性に気付かせ、身近にある問題や課題を考察する能力を養うことができる。

## ○生徒観

本クラスは1学年の特進クラスである。1学年の中でも学習に対する意欲の高い生徒が多く、授業や与えられた課題に対して真摯に取り組む。2学年次には1学年次同様に特進クラスを希望している生徒が多いが、大半は文系を志望しており、数学に対しての苦手意識をもつ生徒は多い。特に、本単元を始めとする「関数」の分野に対しての苦手意識が強い。日ごろの授業では授業内で与えられた課題や問いに対して熱心に取り組むが、間違いを恐れたり正しい答えを求める傾向にあるため、発問に対しての解答や、周りの人に頼ることを躊躇することもある。しかし、教えあい活動やグループ学習などのアクティブラーニング活動を通して、少しずつ自分の考えを表現することができるようになっている。

## ○指導観

本単元の指導にあたっては、まず中学校で学んだ関数についての復習の中で、具体例を交えつつ、関数を用いて身近な物事を表したり解決したりできることを理解させる。中学校で学んだ  $y = ax^2$  のグラフを平行移動することによって  $y = a(x - p)^2 + q$  のグラフを考察し、平方完成を導入することで一般的な2次関数のグラフについても取り扱うことができる。関数に対する苦手意識を払拭するために、2次関数を用いて解決できる身近な問題や、身の回りにある放物線について紹介するなど必要である。2次関数の最大・最小問題に関しては、グラフを用いて視覚的に考察させる。また、ICTを活用することで定義域や軸の変化する関数についての動きを認識させることも可能である。生徒の求める高い学習能力を身に付けさせるため、身近な題材を扱ったり、大学受験を意識した問題にも挑戦したりすることで生徒の興味・関心を引き、また自己表現の場を設けることで個人の考えをより深めていけるような質の高い授業を実施する。日常的に教えあいの場やグループ学習を積極的に取り入れることで、的確な考察を促し、目の前の課題に対して自ら考察しようとする態度を育てたい。



### 3 単元指導目標

- ・ 2次関数を用いて身近な問題を解決しようとする。【関心・意欲・態度】
- ・ 関数の考え方を利用し、具体的な事象を考察しようとする。【数学的な見方や考え方】
- ・ 平方完成を用いて軸や頂点を求め、グラフをかいたり不等式を解いたりすることができる。【数学的な技能】
- ・ 関数を用いて数量の変化を表現することの有用性を理解する。【知識・理解】

### 4 指導計画（単元の配当時間 時間）

#### 第1節 2次関数とそのグラフ（全12時間）

1. 関数の概念を確認・理解し、関数の基本的な用語や記号を取り扱うことができる。 1時間
2. 中学校で学んだ関数の性質をもとに2次関数について理解し、 $y = ax^2 + bx + c$  を  $y = a(x - p)^2 + q$  の形に変形したり、グラフを利用したりできる。 6時間
3. 2次関数の最大・最小について理解を深め、具体的な問題の解決に活用できる。 3時間  
(本時 3 / 3)
4. 2次関数のグラフについて与えられた条件から、その2次関数を決定できる。 2時間

#### 第2節 2次方程式と2次不等式（全12時間）

1. 因数分解や解の公式を用いて、2次方程式の解を求めることができる。 2時間
2. 2次方程式の実数解の個数と判別式 $D$ の符号との関係を理解する。 1時間
3. 2次関数のグラフと $x$ 軸の共有点と判別式 $D$ の符号との関係を理解する。 3時間
4. 2次不等式の解の意味を理解し、2次関数のグラフを活用することのよさを認識する。 4時間
5. 2次不等式を含む2次不等式を考察したり、具体的な問題の解決に2次不等式を活用したりできる。 2時間

### 5 本時

#### (1) 本時の指導目標

- ・ 2次関数のグラフを利用して、定義域に応じた値域、最大・最小を論理的に考察することができる。【数学的な見方や考え方】
- ・ 与えられた条件によって定義域が変わることに気づき、その最大・最小に値について考察したり表現したりしようとする。【関心・意欲・態度】

#### (2) 本時の手立て

- ・ ペアでタブレットを利用した学習を行い、自らの考えを表現する場を設け、学習内容の理解を促す。
- ・ グラフソフトを活用することで2次関数のグラフの変化を視覚的に捉えさせ、定義域の変化による最大・最小の値の考察を促す。

#### (3) 本時の授業仮説

これまでに学習した2次関数の最大・最小問題の内容を元に、定義域の変化する最大・最小問題に対してタブレットを利用したペア学習を行うことで、生徒自ら積極的に考察することができるだろう。また、実際に定義域によって最大値や最小値が変化するようにグラフソフトを用いて視覚的に捉えさせることによって、定義域の変化に応じた最大・最小の値を論理的に考察することができるだろう。

(4) 教材

・教員

①教科書（数学 I Standard 東京書籍） ②パソコン ③タブレット

・生徒

①教科書（数学 I Standard 東京書籍） ②授業用ノート ③タブレット ④学習プリント

⑤リフレクションシート

(5) 学習の展開

	学習内容・活動	教師の支援 指導上の留意点	教材	配当 時間	学習 形態	評価
導入	<p>・提示された内容をリフレクションシートに記入する。</p>	<p>・あらかじめ生徒に学習プリント、リフレクションシート、タブレット（ペアに1台）を配布しておく。</p> <p>・本時の流れについて説明する。</p> <p>○本時の目標を提示する。</p> <p>○本時の活動を提示する。</p> <p>・書くこと、解くこと、ペアで話すことを取り入れながら学習をすすめることを説明する。</p> <p>・リフレクションシートに記入させる。</p>	<p>パソコン (スライド)</p> <p>タブレット</p> <p>プリント</p>	7分	一斉 個人	
	<p><b>本時の目標</b> 定義域に変数を含むときの2次関数の最大値・最小値を求めることができる。</p>					
展開1	<p>・学習プリントを確認する。</p> <p>① 軸, 頂点, グラフの概形を求める。</p> <p>・最小値を求めるために平方完成し、軸、頂点及び概形が必要であることを確認する。</p>	<p>・生徒に問題を提示する。</p> <p>○最大・最小を求めるために必要な事項を復習する。</p> <p>・凹凸、軸、頂点を発問する。</p> <p>・グラフのかき方を復習しながら板書する。</p>	<p>プリント</p>	20分	一斉 個人	
	<p><b>1</b> <math>a &gt; 0</math> のとき、 2次関数 <math>y = x^2 - 4x + 5</math> (<math>0 \leq x \leq a</math>) の最小値を求めよ。</p>					

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定義域を図示しようとする。</li> <li>・<math>x = a</math> が図示できないことを確認する。</li> <li>・ペアで教材を活用し、最小値の変化を考察する。</li> <li>・<math>x = a</math> の場所による最小値の変化を観察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定義域が与えられた2次関数の最大値・最小値問題の解き方を復習する。</li> <li>・定義域の図示について周辺の人と話し合わせながら考えさせる。</li> <li>・タブレットを起動させる。</li> <li>○教材を使って定義域の変化による最小値の変化に気づかせる。</li> <li>・気づいたことは何かを問う。</li> <li>・タブレットに描かれた図をいくつか紹介する。</li> </ul>			個人 複数人  ペア	与えられた条件によって定義域が変わることに気づき、その最大・最小に値について考察しようとする。【関心・意欲・態度】
展開2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最小値が変化する境目について考える。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">② 場合分けをして、概形をかく。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習プリントを確認する。</li> <li>・場合分けによって図の示し方が異なることに気づく。</li> <li>・場合に応じた最小値を求める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グラフソフトを用いて、定義域の変化による最小値の移り変わりを提示する。</li> <li>○最小値に注目させる。</li> <li>・最小値が変化する境目に気づかせ、生徒に発問する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・場合分けをさせる。</li> <li>○<math>a &gt; 0</math> であることに注意させる。</li> <li>・全員で解答を確認する。</li> <li>○生徒の定着度に応じて、最大値についても考察をさせる。</li> </ul>	パソコン	15分	一斉 個人	2次関数のグラフを利用して、定義域に応じた値域、最大・最小を論理的に考察することができる。【数学的な見方や考え方】
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問を解く。</li> <li>・振り返りと自己評価を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書 p88 問1に取り組ませる。</li> <li>○学習内容の定着を促す。</li> <li>・リフレクションシートを用いて本時の振り返りを行う。</li> </ul>	教科書 ノート プリント	8分	個人	

学校番号

学 校 名	福岡県立直方高等学校
指 導 者 職 名	教 諭 田尻俊亮
実 施 日 時	令和元年12月6日(金曜)2時限
実 施 学 級	2年4組(特進文系選択者)
	26名(男16名、女10名)
実 施 場 所	アクティブラーニングルーム

- 1 単元名  
第4章 中世社会の成立  
2 武士の社会

## 2 単元設定の理由

### ○ 単元観・題材観

本単元は、12世紀の終わりに形成された鎌倉幕府という武士による支配体制が強化されていく過程を取扱い、幕府成立の要因や具体的な社会の変化を学習する単元である。成立当初は将軍独裁の体制で運営されていた鎌倉幕府の政治が、源朝の死後、御家人中心の政治を求める動きが強まる中で、北条氏主導の執権政治へ移行していく過程や背景、朝幕関係の悪化による承久の乱の発生および乱後の政治体系の変化などを学習し、今日の社会体制とも関連付けながら考察することで、よりよい政治の在り方とはどのようなものであるかを自分のこととして探究するためにも、本単元は大変意義深い。

### ○ 生徒観

本クラスの生徒は、教師の話聞く態度や、新たな知識・技能を習得しようとする態度は申し分なく、積極的に学ぼうとする姿勢が身に付いてきていると言える。自分の意見を他者に伝えることについてもこれまでの授業の中でかなり前向きに取り組む態度を見取ることができた。しかしながら、ペアトークやグループワークの場面においても、「なぜ、そう思うのか。」を深く説明することができない生徒が多く、自分の主張がどのような根拠に基づいているのかを論理的に説明する力が十分ではないと考えられる。自己の意見を表現する上で、他者の共感を得るには具体的にどうすればよいかという視点を大切にすることで、個人や集団としての成長を促せるような授業を心掛けたい。

### ○ 指導観

多様な変化を経てきた日本の古代社会が、中世には鎌倉幕府の成立によって、武士中心の政治体制に変容していく反面、厳密には公武の二元支配であったことに気付かせ、朝幕の力関係が承久の乱をきっかけに大きく幕府側に傾くことや、あくまでも武家社会の発展のために幕府の諸制度が整備されたにもかかわらず、現実には公家勢力への圧迫などの現象が起こることに着目させたい。その上で、鎌倉時代初期の社会を三角ロジック等の思考ツールを活用しながら、多角的・多面的に考察する場面を多く設定し、様々な変化の要因や結び付きをより深く分析し、自分の主張の根拠に対して、さらなる理由づけを行う行程を踏ませることで、課題である具体的な根拠を持って主張できる力を高めさせたい。

## 3 単元指導目標（到達目標）

- (1) 頼朝の死後、北条時政とその子義時によって、鎌倉幕府の主導権が北条氏に移行していく背景とその後の幕府政治の変化を理解することができる。【知識・理解】
- (2) 承久の乱について、契機となった朝幕関係悪化の背景や、幕府と朝廷双方の状況を鑑み、どちらの立場や主張に必然性があるかを考察し、根拠を明確にして自己の考えを表現することができる。【思考・判断・表現】
- (3) 御成敗式目やその制定の主旨、評定衆や引付衆の設置についての史料から、二元支配の状況や、当時の社会において封建制度の基盤である土地所有権の重要性を読み取ることができる。

【資料活用の技能】

(4) 武士の生活や土地支配の状況が、近世まで続く武家社会の根幹となっていることに興味を持ち意欲的に学習することができる。 【関心・意欲・態度】

#### 4 指導計画…… (5 時間)

第1次・・・源頼朝の死後、有力御家人間の勢力争いが激化する中で、北条氏が台頭し執権としての地位を確立するまでの過程を学習し、頼朝がいかに優れた指導者であったかにも気付かせる。 1 時間

第2次・・ 2 時間

1・・・承久の乱が起こった背景と結果について学習し、乱後の公武のパワーバランスがどのように変化したかを考察させる。 (1 時間)

2・・・承久の乱における幕府と朝廷それぞれの立場や主張について資料をもとに考察し、自分はどちらの立場に正義があると思うかグループで協議し、発表させる。 (1 時間)

(本時 2/2)

第3次・・・「御成敗式目」と「式目制定の趣旨」についての史料から、北条氏が武家の先例に基づいた政策を行おうとしたことを読み取らせ、北条泰時・時頼の時代に執権政治の基盤がつくられることに気付かせる。 1 時間

第4次・・・鎌倉時代の武士の生活が質素であることや、当時は女性の地位が比較的高かったことに気付かせる。また、封建制度の基本である土地支配に関して、朝廷との二元支配の状況が時代とともにどのように変化するか仮説を立て考察させる。 1 時間

1 時間

#### 5 本時

(1) 本時の指導目標 (到達目標)

・承久の乱について、契機となった朝幕関係悪化の背景や、幕府と朝廷双方の状況を鑑み、どちらの正義に分があるかを考察し、根拠を明確にして自己の考えを表現することができる。

【思考・判断・表現】

(2) 本時の手立て

・承久の乱や鎌倉幕府の政治についての複数の資料をヒントに、思考ツール「三角ロジック」を用いて幕府と朝廷のどちらの正義に必然性があるかをそれぞれ考察させた後、グループで協議し意見を交換する。その後グループでの三角ロジックを協力して完成させ、どのような根拠でグループとしての意見になったかを他のグループに説明する。その後再び協議を受けての自分の考えをワークシートにまとめる。

(3) 本時の授業仮説

・三角ロジックを用いて自らの考えを整理したあと、個々人の考えを集団で協議し、さらに多くの考えを聞いた上で再び個人でまとめることにより、歴史的な事象を多面的・多角的に考察し、自分の意見を根拠を持って具体的に表現できる能力が育つであろう。

(4) 教材

・生徒

教科書 (『詳説日本史B』〈山川出版社〉)

図表 (『最新日本史図表 新版』〈第一学習社〉)

ノート

ワークシート

資料プリント

まなボード

リフレクションシート

・教師

教科書 (『詳説日本史B』〈山川出版社〉)

図表 (『最新日本史図表 新版』〈第一学習社〉)

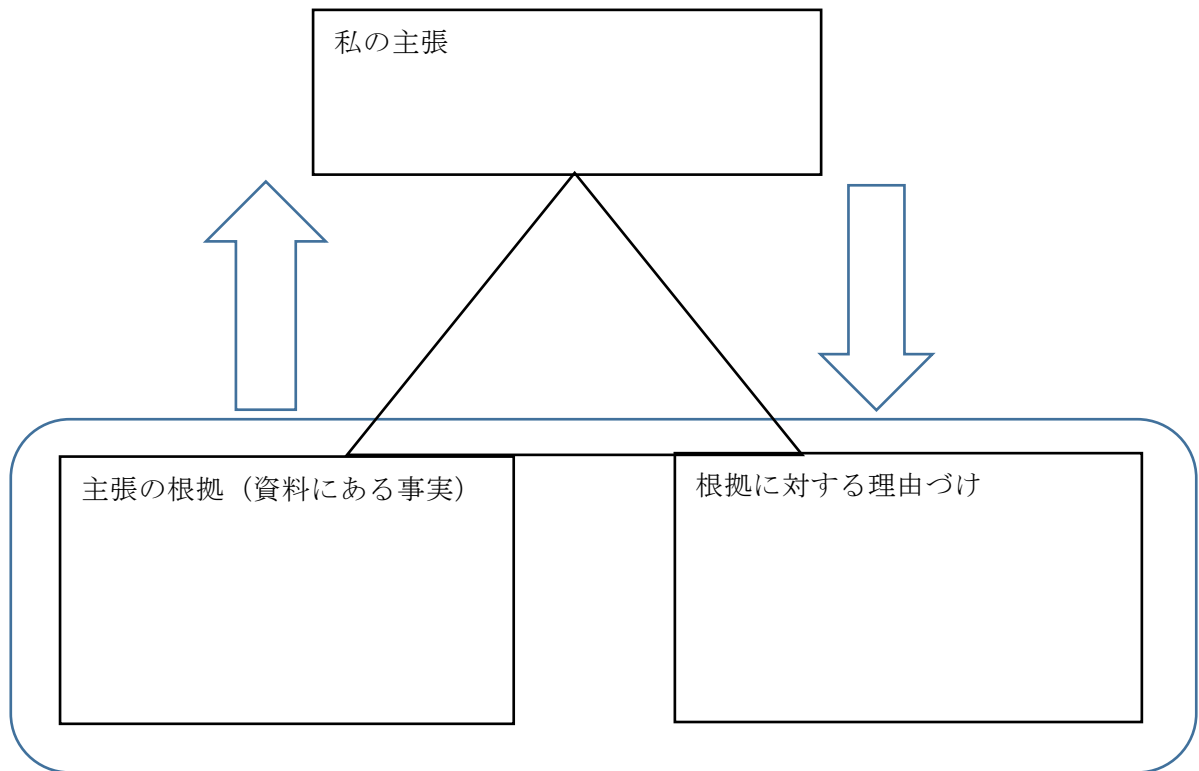
スライド (電子黒板)

(5) 学習の展開

	学習内容・活動	教師の支援 指導上の留意点	教材	配当 時間	学習 形態	評価
導 入	○「正義の反対は何だと思 うか」という教師の質問に対し グループで考える。	○国語的には「悪」や「不義」とい う言葉があるが、この場ではそれに こだわらず、自由に自分なりの考え を持って良いことを伝える。 →「正義」の反対は「別の正義」	スライ ド	5 分	一斉  ペア	
展 開 1	○前時の学習内容(承久の乱) に関する発問に答える。	○復習はスライドを使用し、周囲の 生徒同士では確認し合って良い旨を 伝える。	教科書 ノート スライ ド	5 分	個人  ペア	
展 開 2	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 40px; margin-bottom: 10px;"></div> <p>○活動の手順 (手順1) 配布されたワークシート上 で、発問に対する三角ロジッ クを、史料プリントをもとに 自分なりに考え、完成させる。 (手順2) ・グループ(3名または4名) で意見を交換し、グループと しての三角ロジックを完成 し、まなボードに結果を書き 込む。  (手順3) ・他のグループの意見を見て、 全体で交流を行う。交流後は グループ席に戻り、再度協議 を行って結論を再構築する。 その後、指名を受けたグルー プは、教師の質問に答える形 でより具体的に説明する。 (手順4) ・ワークシート上で自分の考 えに変化があったかどうかを 書き込む。</p>	<p>○セルフシンキングと書き込みを 10 分間とする。  ○グループはあらかじめ設定してお く。協議後グループごとに説明でき るようにすることを伝え、説明者を 決めるように指示する。協議の時間 は10分とする。  ○1名ずつ順番に自分の考えをグル ープの仲間に伝え、協力して意見 をまとめるように指示する。自分の 意見を主張する際、根拠を明確にす ることが重要であることを確認する。  ○全体交流はグループに一人説明役 を残し(途中で交代)、他のグルー プの意見を見て回るように指示する。 時間は5分程度とする。  ○書き込む時間は5分。最終的に「自 分はどう思ったか」という観点で書 き込むように伝える。</p>	<p>ワーク シート 史料プ リント  まなボ ード  まなボ ード  ワーク シート</p>	35 分	個人  グル ープ  一斉  個人	<p>承久の乱につ いて、契機とな った朝幕関係 悪化の背景や、 幕府と朝廷双 方の状況を鑑 み、どちらに正 義に必然性が あるかを考察 し、根拠を明確 にして自己の 考えを表現す ることができ る。 【思考・判断・ 表現】 (様相観察) (ワークシー ト・記入)</p>

ま と め	○リフレクションシートを記入し、ワークシートを提出する。	○正義の反対は別の正義であり、世の中には同様の状況が多く存在することを確認し、自分の意見をしっかり持つことが重要であることを伝える。	リフレクションシート	5分	一斉	
-------------	------------------------------	--	------------	----	----	--

(ワークシートの概要)



協議を終えての自分の考え